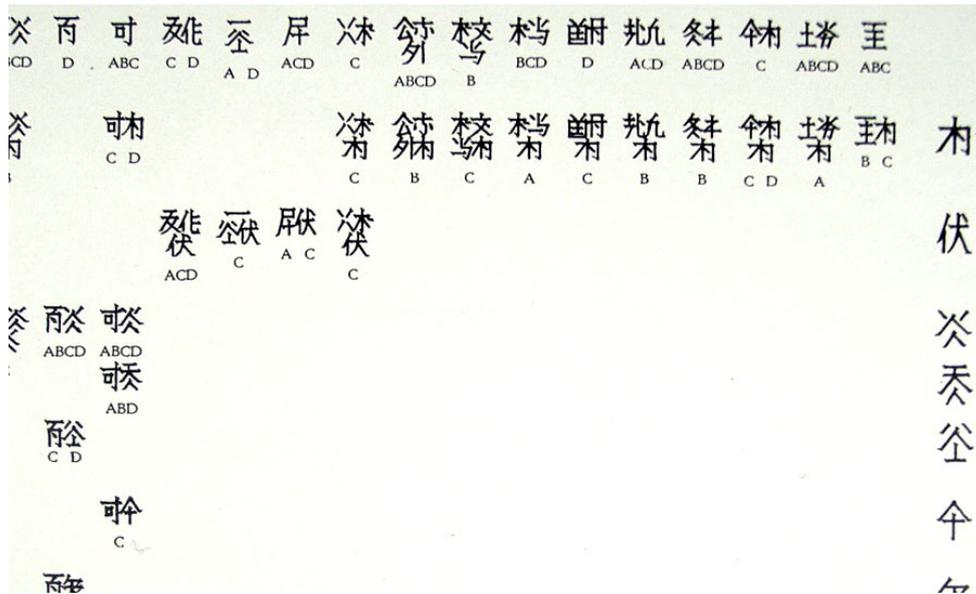


契丹文字接尾語表(『慶陵』)考(1)

吉池孝一

1. 序言

田村實造・小林行雄著『慶陵』(京都大學文學部 座右寶刊行会。1953年3月刊行)の上巻末尾に「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)」および「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(2)」と銘打たれた二枚の表(以下「接尾語表(1)(2)」もしくは「接尾語表」と呼ぶ)が『慶陵』本体とは別刷りとなり、小林行雄・山崎忠・長田夏樹氏という三氏の名を冠して折り込まれている。この「接尾語表(1)(2)」は本来一枚の表であったものを二枚に分割したもので内容は連続している。次の写真は本表の初頭に相当する「接尾語表(1)」の右上部分である。



さて、契丹小字は表音的な文字成分である「原字」²をハングルのように左右上下に組み合わせて単語などの言語単位を表記するわけであるが、単語中の変化しない部分を語幹、変化する部分を接尾語と想定して単語を配列したものがこの「接尾語表」である。

「接尾語表(1)」の右下には次の説明がある。

本表は慶陵出土の四種の契丹字哀册中より、契丹字契丹語の名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等の主要なるものを摘出して、分類表示したものである。ただし類例の豊富でないものは省略した。各字の出典は、興宗哀册文 A, 仁懿皇后哀册文 B, 道宗哀册文 C, 宣懿皇后哀册文 D なる略號をもつて、各字の下に示した。なお表末に参考のため附記した契丹字接尾語の音値は、中世蒙古語との比較によつて比定した形態論上の音値である。(小林行雄・山崎忠・長田夏樹作製)

この説明によつて、契丹語の名詞曲用語尾、形容詞語尾、動詞語尾等の主要なものを摘出して分類表示したということと、中世蒙古語との比較によつて契丹原字の音価を推定したことがわかる。しかしながら、接尾語の機能や語幹の品詞についての説明はない。またどのような手順を踏んで音価を推定したかも不明である。そのようなことは「接尾語表」自体が示す内容から推察するしかない。そこで、接尾語の一つ一つにつきどのような語幹と結び付くかを検討することとした次第である。この表の構成を明らかにすることは五十年代初頭における日本の契丹語研究の水準を明らかにすることに通ずるはずである。先ずは接尾語としてどのようなものが挙げられているか確認をする。

2. 接尾語 49 種

接尾語として表示されているもの 49 種を挙げると次のとおりである。

01. ㄱ ni

² 日本に於けるこの用語の使用については次のとおり。白鳥庫吉 1898(「契丹女真西夏文字考」、『史學雜誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』(岩波書店、1970 年)所収、45-68 頁)、羽田亨 1925(「契丹文字の新資料」、『史林』第十卷第一号。『羽田博士史学論文集 下巻言語・宗教篇』(同朋舎、第二刷 1975 年)所収、420-434 頁)、長田夏樹 1951(「契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を讀みて」、『神戸外大論叢』第 2 卷第 4 号、40-66 頁)は「元字」と称する。田村實造 1938(「遼【言語・文字】」、『東洋歴史大辞典 第八卷』平凡社、465-467 頁)、田村實造 1951(「契丹文字の發見から解讀まで 一村山七郎「契丹文字解讀の方法」を讀む」、『民族学研究』第 16 卷第 1 号(1951.8)、46-48 頁)、田村實造・小林行雄 1953(『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)京都大學文學部 座右寶刊行会。上巻は 1953 年、下巻は 1952 年發行)は「原字」と称する。中国社会科学院民族研究所・内蒙古大學蒙古語文研究室契丹文字研究小組 1977(「關於契丹小字研究」、『內蒙古大學學報』1977 年第 4 期契丹小字研究專号)をはじめとして中国の研究者は「原字」とする。目についたところでは、白鳥庫吉 1898 の「元字」、田村實造 1938 の「原字」が比較的早い。

02. 伏 nu
03. 谷 du
04. 黍
05. 空 da
06. 今 ka
07. 矢 yi
08. 当 yan
09. 关 ca
10. 又 n̄
11. 中 tan
12. 丹又 ta-n̄
13. 丹伏 ta-nu
14. 谷谷 l-du
15. 谷当 l-yan
16. 谷又 l-(u-)n̄
17. 谷万 l-ga
18. 谷比
19. 爻豹 da-sun
20. 爻豹和 da-sun-ni
21. 中凡 la-ku
22. 中凡和 la-ku-ni
23. 中列 la-ba
24. 中列夹 la-ba-su
25. 本 ju
26. 为本 ga-ju
27. 为出 ga-cu
28. 为艾 ga-sa(C)
29. 立本 ġul-ju
30. 立为本 ġul-ga-ju
31. 立为出 ġul-ga-cu
32. 立为艾 ġul-ga-sa(C)
33. 中立本 la-ġul-ju
34. 中立为本 la-ġul-ga-ju

35. 中 立 力 出 la-ğul-ga-cu

表(2)左の内側

36. 券

37. 券 朮

38. 火

39. 安

40. 安 火

41. 及 肉

42. 及 扎

表(1)右側の別枠内

43. 舟 坐

44. 刈 爻

(45. 火)省略されている

46. 刈 爻 火

47. 刈 爻 狩

48. 爻

49. 亦

表(2)左の内側に7種、表(1)右側の別枠内に7種、配されている。このように複雑な配し方をした理由は本表をコンパクトにまとめることにあつたのであろう。以下、一つの接尾語につき、それと結び付く総ての語幹を資料として挙げ、必要なものには注を付す。

3. 接尾語を中心とした資料

接尾語を中心として、一つ一つの接尾語につき、それと結び付く総ての語幹を資料として挙げるわけであるが、その資料の見方を説明しておかなければならない。さきに表1として提示した「接尾語表」の写真をご覧頂きたい。右上の **𠄎** ABC は語幹であり、これは ABC の三種の資料に語幹のみの形で現れることを示す。その下の **𠄎 朮** BC は接尾語 **朮** を後続させた形として BC の資料に現れることを示す。いま一つ別の例を確認すると次のようである。接尾語 **朮** の段を横にたどると語幹 **𠄎** ABCD の下に **𠄎 券 朮** A がある。以上が「接尾語表」の構成である。

これから提示する資料においては、接尾語 **朮** と結び付く語幹 **𠄎** と、その語幹と **朮** とが結び付いた語 **𠄎 朮** を「001. **𠄎** ABC : **𠄎 朮** BC」のようにして表記する。なお 語幹が単独の形で出現しない場合は 18. -- : **立 券 朮** CD のように--で示す。表中の ABCD は資料名

である。

A：興宗哀冊　B：仁懿哀冊　C：道宗哀冊　D：宣懿哀冊

資料には参考までに注を付すが、注において利用する文献を次のように略称する。

金毓黻 1934. 『遼陵石刻集録』(『集録』)

田村實造・小林行雄 1953 『慶陵』(『慶陵』)

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』(『研究』)

劉鳳翥・唐彩蘭・青格勒 2009. 『遼上京地區出土的遼代碑刻彙輯』(『彙輯』)

注において「原資料」という場合、AB は当時の模写を指し、CD については拓本を指す。

なお、契丹原字を文字番号で示す場合がある。その場合の文字番号は『研究』による。𐰽𐰺(C4-2)は𐰽𐰺が資料 C の 4 行 2 字目にあることを示す。

3.1. 「01. 𐰽 ni」

𐰽 ni と結び付く語幹は次のとおり。

001. 𐰽 ABC：𐰽𐰺 BC

注. 『集録』は𐰽と𐰽𐰺をともに帝と釈す。『彙輯』は𐰽を帝、𐰽𐰺を帝之と釈す。なお、𐰺を属格語尾とするのは『慶陵』と「接尾語表」著者の共通認識である³。吳英喆 2007 は𐰽 en 「領格」(属格)とする⁴。

002. 𐰽𐰺 ABCD：𐰽𐰺𐰺 A

注. 語幹𐰽𐰺 ABCD とあるが、原資料によると AB は𐰽𐰺、CD は𐰽𐰺とする。長田 1951 は𐰽 348 を楷書体、𐰽 109 を行書体とし同一文字とする。𐰽𐰺𐰺は A に無い。なお原字の配列につき、A は左右とするが B(17-9, 18-9)は上下とする。

003. 𐰽𐰺 C：𐰽𐰺𐰺 CD

注. 『集録』は𐰽𐰺(C4-2)を歳と釈す。『彙輯』は𐰽𐰺(C4-2)を歳、𐰽𐰺(C31-17)を壽、𐰽𐰺𐰺(D23-22)を壽之と釈す。

004. 𐰽𐰺 ABCD：𐰽𐰺𐰺 B

注. 『集録』は𐰽𐰺を清寧(年号)と釈す。『彙輯』は𐰽𐰺𐰺及び𐰽𐰺𐰺を清寧(年号)、𐰽𐰺𐰺を眷顧と釈す。

005. 𐰽𐰺 ACD：𐰽𐰺𐰺 B

注. 『集録』は𐰽𐰺を史と釈す。『彙輯』は𐰽𐰺𐰺を字と釈す。なお原字の配列につき、D(13-20)は上下とする。

³ 吉池孝一 2011(「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」, 『KOTONOHA 百号記念論集』(古代文字資料館)単刊第 5, 90-107 頁)参照。

⁴ 吳英喆 2007(『契丹語靜詞語法範疇研究』内蒙古大学出版社)参照。

006. 酋付 D : 酋付 **相** C

007. 朮与 BCD : 朮与 **相** A

注. 原資料によると朮与 C(35-23)の与 361 は与 100 とみえる。

008. 朮丈与 B : 朮丈【丈】与【与】 **相** C

注. 原資料によると朮丈与相はCに無い。これはC(5-15)の朮丈与相に相当。長田 1951 は与 361 を楷書体、与 100 を行書体とし同一文字とする。

009. 公亦外 ABCD : 公亦外 **相** B

注. 『彙輯』は公亦外を宗室と積す。

010. 又朮 C : 又朮 **相** C

014. 可 ABC : 可 **相** CD

注. 『研究』はCD 可相の可 61 を可 60 とする。『彙輯』はC(35-4)を可 60 としD(16-17)を可 61 とする。

016. 百谷 ABCD : 百谷 **相** B

注. 『集録』は百谷 D(19-10)を后太重熙の太と積す。なお原字の配列につき、C(26-36)は上下とする。

017. 百谷【谷】 CD : 百谷 **相** C

注. 原資料によると語幹百谷 CD の谷 254 は谷 350。

018. 一 : 壘谷【谷】 **相** CD

注. 原資料によると壘谷相 CD の谷 349 は谷 112。長田 1951 は谷 349 を楷書体、谷 112 を行書体とし同一文字とする。

027. 九安 ABCD : 九安 **相** BC

注. 『集録』は九安相 BC を皇弟と積す。『彙輯』は九安を國、九安相を國之と積す。

028. 止安 AC : (止安全 **相** B)

032. 穴 ABC : 穴 **相** C

注. 『集録』は穴を正と積す。『彙輯』は穴を首・官・正、穴相を首之と積す。

033. 丞【丞～丞】 ABCD : 丞【丞】 **相** ABC

注. 原資料によると丞 4(BCD)と丞 6(ABCD)の別がある。本表の著者は両者を同一字とみなしている。もっとも単純な誤植である可能性もある。丞相については丞相ではなく丞(6)相である。『集録』は丞 4 を十干の辛・庚(辛)と積す。丞 6 に積はない。『彙輯』は丞 4 を十干の辛、丞 6 を山、丞(6)相を山之と積す。

034. 込 ABCD : 込 **相** A

039. 朮存中 ABCD : 朮存中 **相** C

040. 住及狩【狩～狩】 ABCD : 住及狩 **相** C

注. 『研究』はAC 𠂔𠂔𠂔(153)、ABD 𠂔𠂔𠂔(152)、のように𠂔 153 と𠂔 152 を区別するが、原資料を見る限り区別は困難である。『集録』は両者を区別せず同一字とし、𠂔𠂔𠂔を聖と積す。『彙輯』は𠂔𠂔𠂔(153)と𠂔𠂔𠂔(152)と𠂔𠂔𠂔(153) 𠂔を共に聖と積す。なお『彙輯』は𠂔 153 と𠂔 152 を異体字として処理しているようである。

057. 𠂔𠂔 ABCD : 𠂔𠂔 𠂔 AB

注. 𠂔𠂔 ABCD とあるが原資料によるとCに𠂔𠂔は無い。『集録』は𠂔𠂔-𠂔 A(35-2)を𠂔𠂔-𠂔と誤写したうえで𠂔𠂔-𠂔を頽然と積す。

058. 𠂔𠂔 D : 𠂔𠂔 𠂔 D

注. 『彙輯』は𠂔𠂔を金烏の鳥、𠂔𠂔 𠂔を長慶の慶と積す。

068. 𠂔 ABCD : 𠂔 𠂔 C

注. 『彙輯』は𠂔を事と積す。

069. 𠂔【𠂔】 ABCD : 𠂔【𠂔】 𠂔 ACD

注: 本表は𠂔と𠂔を区別せず一律に𠂔とするが、𠂔 ABCD と𠂔 𠂔 ACD は原資料によると𠂔である。なお、𠂔と𠂔を区別せず一律に𠂔とする点は長田 1951 も同様である。長田 1951 の「契丹元字總表」には𠂔のみ登録し𠂔はなく、書体と出度数を示した表では𠂔を行書とし、楷書は空欄とする。出度数すなわち出現頻度は𠂔と𠂔を合計したものとなっている。なお単独の𠂔は無い。『集録』は𠂔を年、𠂔 𠂔を歳と積す。『彙輯』は𠂔を年・爺(C10-22)、𠂔 𠂔を歳次の歳および年之(C34-12)と積す。なお𠂔 𠂔は無い。

070. 𠂔𠂔𠂔 ABCD : 𠂔𠂔𠂔 𠂔 BCD

注. 語幹𠂔𠂔𠂔 ABCD とあるが原資料によるとCに𠂔𠂔𠂔は無い。

071. 𠂔 ABCD : 𠂔 𠂔 D

注. 『集録』は𠂔 C(6-30)D(6-2,9)を禮と積す。『彙輯』は𠂔を禮・印(C12-14)、𠂔 𠂔を禮之と積す。

075. 𠂔'平 ABCD : 𠂔'平 𠂔 C

注. 𠂔'(第三画横線の最後、左下への折り返し線の長いものがある。これを短い𠂔と区別してコンマを付し𠂔'とする)と𠂔と𠂔は字形を異にする。その詞頭・詞中・詞尾における分布は次のとおり。

詞頭	詞中	詞尾
𠂔		
𠂔'		
	𠂔	𠂔

この三種の字形につき、長田 1951 および「契丹原字出度表」⁵は、**土**を楷書体、**ち**を行書体とし同一文字として出現頻度数を出し、**ち'**を別字として出す。すなわち、長田 1951 および「契丹原字出度表」は詞頭**ち'**≠詞頭**土**=詞中**ち**=詞尾**ち**とする。しかしながら、**土**は詞頭に使用され、**ち**は詞中と詞尾に使用されることからみて、これを書体の相違とするのは困難である。この点につき、『研究』は詞頭の**ち'**と詞中詞尾の**ち**を同一字として処理をし、詞頭の**土**とは異なる原字とする。すなわち、詞頭**土**≠詞頭**ち'**=詞中**ち**=詞尾**ち**とする。本「接尾語表」はどのようなかという、詞頭**土**と**ち**を別字と見ているようである。即ち詞頭**土**≠詞頭**ち'**≠詞中**ち**=詞尾**ち**とする。さて、釈義については次のとおりである。『集録』は**ち'平**(C7-16)を彫略の彫と積す。『彙輯』は**ち'平**を雲と積す。

表(1)右側の別枠内上段

上段 1. **𠂔** 𠂔 AC : **𠂔** **𠂔** **𠂔** D

注. 原資料によると **𠂔** **𠂔** は D に無い。『集録』は **𠂔** A (2-7) を興宗神聖大孝章天重熙皇帝の章および単独で章と積す。『彙輯』に積は無い。

・・・待続・・・

⁵ 「契丹原字出度表」は故長田夏樹先生が残されたノートなどの中から発見されたものの一つである。61種の契丹原字につき、道宗哀冊と宣懿皇后哀冊における詞頭・詞中・詞尾・単独の出度数と出現比率を記した表である。吉池孝一 2011(「長田夏樹氏の契丹語ノートなど 一契丹原字出度表一」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)第 103 号, 9-19 頁)参照。